

43405

教科書文庫

4
291
31-1932
20000 65707

Kodak Gray Scale



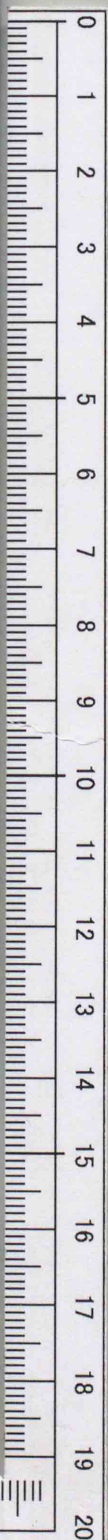
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3a
292
007

教科
31
000

郷土讀本

尋五

內中原尋常小學校



中央図書館
資料室

教科書文庫

4

291

31-1932

2000065707

3a
292
AB7

郷土讀本

内中原尋常小學校

尋五



広島大学図書

2000065707



緒言

天の原ふりさけ見ればかすがなる

三笠の山に出でし月かも

これは阿倍仲麻呂が漢土に留學の折、懷郷の情をのべた歌であります。誰でも異郷に居て故郷を慕はしく思はないものはありません。故郷を愛せないものはありません。それは年を経れば経る程、離れば離れる程その情は深くなるものであります。恰も幼兒が母親を慕ふ情愛に似たものであります。

故郷は私達の生れた所であり、大きくなつた土地であります。郷土は私達の智慧の木を育て、體や心を養つて呉れた忘れることの出来ないものであります。

日々楽しい生活をしてゐる私達の郷土には古い歴史があります。美しい自然があります。今日の郷土はこの歴史この自然の恵みを受

けて一日一日と進歩し繁榮して來たのであります。

やがてこの郷土に美しい花を咲かせて呉れる皆のために今回郷土讀本を編纂しました。この讀本で足りない所は文庫なり圖書館なりで更に研究して一層深く郷土を知つて下さい。

深く知ることはやがて深き愛を持ち來たすからであります。強き愛を持つことに依て力強い活動はつゞけられます。そこに郷土は愈愈榮え、國は益々隆んになり行きます。

この讀本によつて少しでもかうした心の芽が養へますれば喜びの至りであります。

尚ほこの讀本は内田先生の非常なお骨折と諸先生のお力に依て出來たものであり、奥原碧雲先生の御校閲を得ましたものであります。茲に記して感謝の意を表します。

昭和七年初秋

城西學園 澤村曉之助

目次

- 一 松江市歌……………一
- 二 松平不昧公……………二
- 三 佐陀運河……………三
- 四 山内曲川……………一〇
- 五 神幸式の起り……………一三
- 六 大社から一畑へ……………一七
- 七 小供の歌……………二二
- 八 眞山登山……………二四
- 九 林間學舎……………二七
- 十 隱岐島だより……………三〇
- 十一 玉造遠足……………三四

三	水	の	旅	………	三七
三	松江	の	歴史	………	四一
四	松本	歡次郎	………	………	四四
五	島根	の水産	………	………	四七
六	松江	瓦斯會社見學	………	………	四九
七	神	在	祭	………	五二
八	直政公	の	初陣	………	五五
九	島根縣	の	天然記念物	………	五九
十	山陰土産	—	松江	………	六二

一、松江市歌

一、大地は鳴りぬ	あかづきの
空にみなぎる	熱意氣
山陰文化の	中心ご
明けゆく都	お、松江
二、秀麗比なき	城山の
堅きいしずる	動きなく
市民の護り	仰ぎ見よ
理想は高し	お、松江
三、不拔の雄圖	胸に秘め
強く正しく	朗らかに
力のかぎり	いそしみて

一、松江市歌

二、松平不昧公
築き上げなん

お、松江

二

二、松平不昧公



松平不昧公

不昧公は藩祖直政公より第七代目の殿様で、本名は治郷といつてゐた。不昧公といへば直ぐに「お茶の道に勝れて居られた殿様」といふ程名高い不昧流を御はじめになつた方であるが、公はお茶の道ばかりでなく、政治にも、學問にも、美術にも、武藝にも通じて居られた偉い殿様であつた。

公が家を御継ぎになつたのは、御年

十七才の時、その頃松江藩は色々な事、非常に財政が行きつまつて、世間では松平家破産まで噂をしてゐる時であつた。そこで公は先づ朝日丹波を登用して財政立直しの計畫を立てられ、簸川の治水工事を起し、洪水を防ぐと共に多くの水田を作られ、又井上惠助を用ひて神門郡に防砂工事を完成する等、農業を盛にし國を富ます計畫を實行せられた。次いで佐陀運河を開き洪水を防ぐと共に舟運の便を計られた。その他人蔘の栽培や、鐵山業の保護、野白紙の製造獎勵とか或は木實油、蠟燭の製造をはじめ、畜牛の保護、馬匹の改良等あらゆる方面にわたつて産業を盛んにせられたので、破滅まで噂せられてゐた松江藩の經濟は非常に富裕となり、公は遂に江戸の火消役を務められるやうになつた。

公はまた美術工藝の方面をも非常に獎勵せられ、公の時代には長岡住右衛門、土屋善四郎等の名工出で樂山燒、布志名燒を再興し、又漆

工の名人に勝軍木庵宗一、漆壺齋清兵衛、木工の名手に小林如泥等出で出雲の美術工藝の名を後世に残すやうになつた。

次に特筆すべきは出雲に於ける學校の嚆矢が公によつて開かれたことである。それは寶曆七年桃白鹿先生を江戸より招き、母衣町に文明館といふ學校を置かれ藩士の教育をはじめられたのである。

この様に公の御事蹟は仲々多く、我が出雲國の文化は公によつて非常に進められたのである。

最後に公の御茶の道に於ける逸事をのべて見よう。

江戸のある葉茶屋の店に釜が掛つてゐたのを公が御覽になつて、「これが本當の葦屋釜といふものである」と仰せになつた。葉茶屋の亭主は非常に喜んで、早速公に箱書をして戴き度いと御願ひ申した。しかし公は箱書はなさらなかつたが、その評判が江戸中にひろまり「あの葉茶屋には不昧公の御目に留まつた葦屋釜があるさうだ」

といふので大變な見物人が集つて、その葉茶屋は非常に繁昌したといふことである。

又或る時、公がお茶のお催をなさつた時、茶の席に居た或る武道の達人に向つて

「自分の茶手前を批評せよ」

と仰せられた。その時武道の達人は

「私はお茶の方はわかりませんが、公が茶をお立てになつてゐる時、刀を抜いて切り込まうと思つて狙つてゐましたが、少しの隙もありませんでした」

と申し上げたといふ。

公は藩主であること丁度四十年、松平家十二代の國主中で一番治世が長く、その御治績もすぐれた御方であつた。(松平不昧傳に據る)

三、佐陀運河

宍道湖と日本海をつなぐ佐陀川は、今から約百六十年程前に清原太兵衛といふ人によつて開鑿かまされたものであります。

今では宍道湖は波おだやかな風光のよい湖ですが、この運河が出来るまでは雨が多く降りつゞく水嵩が高まつて、湖岸一帯の稲田を浸し、又松江の市街は殆ど水びたりとなるなごなか／＼恐ろしいものでした。そのため昔からこの地方の人々は、これ程の難儀をしたか知りません。そこで昔から、今の佐陀運河の地を堀割つて宍道湖の水を日本海に注ぎ、この災難からのがれやうと計畫したことが度々でしたが、ごうも實行することが出来ませんでした。

そして不昧公の時代には度々洪水があつて、中にも天明三年は最もひどく、その年には、十四万五千石以上も御米の損害があつたので

す。そこで太兵衛は人々をこの水害の苦みから救はうといふので運河開鑿の事を十二回も殿様に願ひ出たのです。然し松江藩ではその工事が並大抵の事ではないのでなか／＼御許がありませんでした。太兵衛は不昧公の家來で、身分はひくかつたが中々しつかりした人物で慈悲の心深く、勝れた才能を持つた人で、殊に治水土木の事に長じた人でした。ごころがその頃また／＼宍道湖が氾濫はんらんして、松江市は水浸りとなり、三ノ丸御殿までも水に浸つた程の事がありましたので、ごう／＼太兵衛の願は聞き届けられました。

天明五年三月太兵衛はいよ／＼開鑿の工事に着手することになりました。時に太兵衛は年七十四歳の老年でした。彼は我が身の老も忘れ、數万人の人夫を使つて一心に工事に勵みました。工事を進めるについて、村々の人の反對や色々の迷信のために非常な困難に出合ひました。殊に堀割工事の實際にあたつては、何日も何日もかゝつ

て堀つた運河が、一夜の内に崩れて泥海になるやうな事が度々あり
ました。村の人々はこの有様を見て

「これは佐太神社の神領を開鑿するので神様の御怒りにふれたの
だ」

ごいつて騒ぎ出しました。しかし人を救はうごいふ一心の太兵衛
は少しもその決心を挫くことなく、それから毎日江角浦まで行つ
て海水で身をきよめ、佐太神社と朝日山に日参して工事の完成を御
祈りして工事をすゝめました。

かくて土氷る冬の日も、河水沸く夏の日も、たゞ一心こめて堀割工
事に勵みましたので、さしもの難工事も三年目の天明七年の秋にな
つて出来上りました。運河の全長は十二軒、川幅は六十米、實に當時と
してはめづらしい大運河です。

これで今迄のやうな恐ろしい水の害から救はれる事が出来たの

です。殿様をはじめ、実道湖畔のものはいふに及ばず、運河に沿うた村
々や、江角浦の人々はごんなに喜んだところでせう。

ごころが運河が出来上るご間もなく、太兵衛は長い間の心配と身
の疲さから病の床につき、種々の心盡しや看病の甲斐もなく、十二月
二十八日、七十六才を以て佐陀の里でなくなつてしまひました。

やがてその年も暮れて天明八年正月十一日盛んな運河開通式が
行はれました。しかし悲しくも、此の工事第一の功勞者である太兵衛
の姿はその席上には見出せませんでした。

かくて今日に至るまで、恐ろしい水害も少く湖畔にはひろくご
した新田が多く出来、松江、惠曇を結ぶ水運の便ひらけ、幾十万人々
は太兵衛の恩澤を受けてゐるのです。

佐太橋を渡り、佐太神社の賽路を進むと左手の路傍に立つ大石碑
がある。これこそ太兵衛の偉業を永遠に語る頌徳碑なのです。

四、山内曲川翁

松島も見しが故郷の湖涼し

この句は三齋流茶道の宗匠として又正風の俳人として名高い山内曲川翁が長い俳諧修業の旅を終つて、故郷松江に歸つた時に咏んだ俳句です。

曲川翁は、文化十四年二月白瀧本町の紙屋長右衛門の長子として生れた人です。十三歳の頃兩親を失ひ、一時は母の生家である西川津村に居たが、後松江に歸つて商店を開いてゐました。その頃から翁は茶道を習ひ、又俳諧の研究をはじめましたが、その俳諧は日と共に上達し俳諧の會などでは何時も第一等であつたといひます。

曲川翁は一心に俳諧の研究にはげみました。そして俳諧に對する

心持ちが進んでくるにつれて、自分の一生涯を俳諧の道に打ちこんで行かうといふ考が深くなり、さうして三十一歳の冬

身は風にまかせてむかふ枯野かな

といふ句を、枕許の行燈に書き残して、住み馴れた故郷を後に俳諧修業の旅に出たのです。翁はその後或は吉野山に、或は江戸に、或は京都に、東海道に、俳諧修業の旅をつゞけ、翁の俳句は非常に上達し、到る處でその名を謳はれるやうになりました。曲川翁は松尾芭蕉を最も慕ひ、遂に芭蕉行脚の後をたづね奥州の旅に出たのです。

かくて翁は十数年の長い俳諧修業の旅の後安政五年なつかしい故郷松江に歸つて來たのです。母衣町普門院の境内にある芭蕉堂は、翁が建てたもので、堂内には名工荒川龜齋が刻んだ芭蕉の像が安置してあります。堂の傍にある

見たまはせ樂山の花おうの湖

と書いた句碑も翁が建てたものです。

又天神境内にある芭蕉の句で有名な

このあたり目に見ゆるもの皆涼し

の句碑も亦翁が自分で書いて建てたものです。

松江に歸つてから約四十年間、俳諧とお茶の道にいそしみながら、多くの門人を教へてその一生を終つたのです。

翁は死ぬる前、寺町の全龍寺の境内に

何一つ見えねど露のあかりかな

といふ句碑を建て、自分の墓所と定めたのです。かくて曲川翁は明治三十六年五月十九日、八十七歳の長壽を以て、俳句生活の生涯を終つたのです。

故郷や妻はなけれど更衣

人くるもこぬも情や庵の月

御佛も月花見ませ床几山

葉に風や青梅ちらりく見え

けさかけた取次出たり蓮の花

五、神幸式の起り

ホーオエンヤ

ホーランエーエ

エヤサノサーサイノ

ラノランラ

昔風の歌聲を五月の水郷の空に流して、きれいに飾つた舟行列の一行が御舟屋川を静かに上つて来る。川は兩岸といはず橋の上とい

はず見物人でいつばいだ。百隻に近い舟行列は、青、白、紫、赤等ごりぐの旗やのぼりをかゝけて、川面にうつるその影は目もさめるやうだ。御神樂船から流れる笛、笙、太鼓の音は何ごもいへぬ神々しさで見物人の胸にひびく。美しくてみやびやかなこの舟行列の中でもごりわけ人目をひくものは五隻の舞船だ。「ホーオエンヤ……」の歌聲の流れるのもこの船からだ。船の前後には男裝女裝の舞人が、美しい衣裳飾りをして、劍權又は采を振り、漕ぐ船脚にあはせて舞つてゐる。

それは日本に於ける三大船神事の一として、寛永以來十二年目毎に、五月の水郷を彩つて來た松江城内稻荷神社の神幸式還御の華やかな行列である。

この神幸式の起原については色々面白い傳説がある。

藩祖直政公が信州松本から出雲へ御國替になつて、千鳥城へ御入城になつてから間もない事である。公が信州で非常に御信心してゐ

らつしやつた稻荷様が、跡を慕つて出雲に來られ、阿太加夜神社まで御出でになり

「自分は信州から來て、今、阿太加夜神社にゐるから早く松江に社を建て、迎へに來て呉れ」

と御告げになつた。やがて社殿が出來て御祀りせられたのが今の城内稻荷神社である。その後この城内稻荷様は代々松平公の御使役をつとめられ、江戸と松江との間を往復して居られたので、松江藩へは江戸幕府などの様子が非常に早くわかつた。傳へられてゐる。或時、稻荷様が松平公の手紙を持つて江戸へ行かれる途中、犬に追はれて非常に困つてゐられた時、阿太加夜神社にかくれてその難を助かられたことがあつた。このことがあつてから後、城内稻荷様は阿太加夜神社へ御禮のため御行きになることが始まり、今に傳はる神幸式が起つたといひ傳へてゐる。そしてあの華やかな權傳馬の供奉が加は

つたのは、何時の頃からかその時代ははつきりしてゐないが、或る年の神幸式の時の事である。大橋川を下つた船行列が、馬瀉の沖合にさしかゝつた時、しげにあつて自由を失ひ、御船の一行は激浪に呑まれようとしたころがあつた。供奉の船人達は、貴い神輿に従つてゐるころ、て聲をかぎりに救ひを求めた。折よく近くを通りあはせた帆船はこの一行の難船を見て、救つて呉れたのである。

供奉の船人達の喜は何にもかへがたい程であつた。餘りのうれしさには供奉の人々は、ありあはせた船底の櫂を取り上げて、神様を救つて呉れた人々に対して舞をまうて感謝の意を表したのであつた。この舞が後の「ホーランエーエ……」の權傳馬の華やかな踊りとなつたこの事である。

ごにかくこの神幸式の船神事は、十二年目に一度しか行はれないものであるが、日本中にも珍らしい神事である。

最近行はれたのは昭和四年の五月であつた。

六、大社から一畑へ

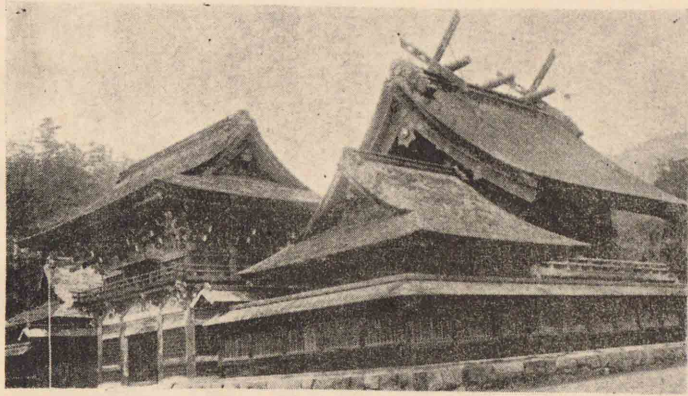
汽車は尖道湖の南岸をひた走りに走る。車内は僕等の一行で満員だ。元氣な話聲、愉快な笑聲。先生もにこ／＼して一同に交つて話してゐらつしやる。

出雲今市驛で大社行に乗り換へるごまもなく大社驛に着いた。日本一といはれる鐵筋コンクリートの大鳥居をくゞつて神門通を進むご、町の兩側は旅館や土産品を賣る店が軒を並へてゐる。

坂道を登りきると木造の舊大鳥居があり、こゝから神苑になる。祓橋を渡つて松並木の參道を行くと、戦利品の大砲や石燈籠などが外苑内の程よい所々に置かれてあり、きれいな泉水や四阿もある。植ゑ

られた木はまだ時代がつかないが、一面の芝生は何ともいへぬ美しさである。観光の人々が苑内の小路を打ちつれて行く姿は、神都にふさはしいものであつた。参道を行き終る頃、左方に新築の勅使館があり、正面には八雲山のうつさうたる森を負うた大社の社殿がある。

八 足 門
青銅の鳥居をくぐつて拜殿の前に整列して拜んだ。こゝで御神樂をあげてもらつてから、後へ廻ると御手洗水がある。このあたりには數百羽の神鳩が飛び下りて遊んでゐる。口をすゝいで八足門の前へぬかづき、つゝしんで大社を拜んだ。社殿の大きいことは眞に日本一である。本殿の高さは現在は八丈だが、昔は三十二丈もあつた。



いふことである。境内を廻ると、本殿の外にもまだ澤山の小さい社が御祀りしてあつた。本殿の裏手に寶物殿がある。僕は七八人の友達とこゝを拜觀した。幾百點とも數知れぬ貴重な寶物が陳列してあつた。歸りに會所に寄つて八千矛命と櫛稻田媛の神像を拜觀した。

社頭を辭して、千家邸内にある大社教本院を拜んで稻佐濱へ出た。こゝは太古、稻佐の小濱といつて國ゆづりの談判があつた所だと傳へられてゐる。濱の茶屋でお辨當を食べながら、先生からその時の面白いお話を聞いた。

打ち寄せる波はむれたり、小貝を拾つたりして二時間餘りこの濱で遊んでから、大社神門驛へ急いだ。

電車は廣い簸川平野の一隅を走り、やがて宍道湖の西端に沿うて小境灘驛に着いた。こゝで一畑行に乗り換へた。電車は湖水を後に山間に入り、約六分で一畑驛のプラットに入つた。

驛前は土産品を賣る店や宿屋が並んでゐた。石段を登ること八町、薬師堂前の廣場へ出た。一同打ちそろつて本堂に禮拜した。お薬師様は眼の病をお癒し下さるごいふので、全國よりの參拜者の數は年に三十萬人以上もあるこのことであつた。しばらく自由に山上で遊んでから、先生は僕達を集めて本尊薬師如来にまつはる面白い傳説を聞かせて下さつた。

下山して再び車中の人となつたのは午後四時過ぎであつた。やがて小境灘驛を過ぎると湖岸に沿うて電車は東へ走る。始めて見る湖北からの尖道湖の景色は美しい。夕陽を浴びた眞帆片帆、湖面をかすめて飛ぶ水鳥の群……はるか湖水の彼方には紫色の中國山脈が横はつてゐる。

七、子供の歌

○

こゝはごこの細道ぢや。

天神様の細道ぢや。

ごうか通して下さんせ。

用のないもな通しません。

この子の七つの御祝に

お札をさめに參ります。

行きはよいが、かへりはこはいぞ。

ずつと通れ、ずつと通れ。

○

いゝこと聞いた、十聞いた。

七子供の歌

七子供の歌

洞光寺山へ聞えて、
松が三本たふれて、
すけて起いた。

○

かんごかんごせうや。
仲よにせうや。
地藏さんの水を、
ごんごごくんで、
松葉にいれて、
まつこうかへつた。

○

一山越えて、
二山越えて、

三やまのうしろに火がちよんぼちよんぼ見える。

狐さん、あそーばや。

いま御飯の最中。

おかずなーに。

梅干かうこ。

ひごつちようだい。

あなただーれ。

うさぎ。

あなただーれ。

小うさぎ。

○

あごの鳥先いけ、
わりが家がやけーけん。

七子供の歌

早ういんで水かけ、
水がなかやらうぞ。
餘つたら子にやれ。
子がなかもごせ。

八、眞山登山

今日は幸盛會の日だ。
しつこりと朝露の置いた田舎道を、我々の一行は先生に導かれて眞山へ向つた。行手には眞山、白髪、小白髪等の古城趾がそびえてゐる。進むにつれて山は兩方からせまつて、川の流もせゝらぎの音をたててゐる。

常福寺に着くと一同はしばらく休んで汗を入れ、上着なごあづけ

ていよく山へ向つた。白髪さんの山麓さんは左手にせまり、めざす眞山は眼前にひかへてゐる。

やがて坂道にかゝる。坂は本當に急で、昔の武士はよくもこんな所を重い鎧冑よろいのいでたちで上り下りしたものだ。感心しながら登つた。登るにつれて眼界は次第にひらけ、ふりかへつて見る。松江市街や宍道湖が朝日に輝いて何ともいへぬ生き／＼した感じを與へた。大分上つた所に相木森之助や勇婦更科さらの墓がある。私は一本のしび木をたて、拜んだ。

坂は次第に急になる。

まもなく山上の平地に着いた。こゝは昔の三の床さんといはれた所だと聞いた。それから二の床、一の床を経て眞山本丸に着いた。そこには幸盛達ゆきもりが奉じた尼子家最後の主、勝久公の碑が建てられてあつた。整列して勝久公の碑に禮拜してから解散わかて、四方の景色をながめたり、

昔の城の石垣の残りなごをしらべた。

やがて一同は勝久公の碑前に集つて先生から、七難八苦主家再興の爲に、強敵毛利の軍と合戦をつゞけ、山陰の麒麟兒と謳はれた幸盛のお話を聞いた。幸盛が奮闘したその古戦場に立つて、當時のお話を聞いて居ると、私達の胸に何ともいへぬ力強いものが湧き上るのが感じられた。

はるか彼方、廣瀬のあたりを見遣りながら下山の途についた。

山を下りて再び常福寺に寄り、本堂に上つた。こゝで校長先生や講談師の方や和尚様などから幸盛に關する色々な面白いお話を聞き、最後に三日の月影拜みつゝの唱歌を歌つて會を終つた。今日の會は本當に愉快だつた。

常福寺を出たのはもう正午近かつた。眞山は眞夏の強い日光に照らされて、ぎぜん空にそびえてゐた。

九、林間學舎

七月二十八日 晴

朝寢坊の僕が、今朝は早かつたので皆から笑はれた。用意が出来てゐると川本君が誘ひに來た。二人は元氣よく校歌を歌ひながら、朝の街路を急いで天倫寺へ向つた。今日から待ちに待つた林間學舎が始まるのだ。堂形の松並木の間から見える朝の湖水はすがすがしい。行つて見たら來てゐる者はまだ五六人だつた。ボール投げをしてゐる内に先生も御見えになるし、友達も大分やつて來た。

やがて八時になると、一同は本堂前に集つて東の方へ向つて遙拜した。朝會を終つて本堂に入り、席をきめていたゞいて朝の勉強にかかつた。

九時になつて勉強がすむと楽しいお茶の會だ。みんなの顔は嬉し

さうにつや／＼としてゐる。僕達は牛乳屋さんが持つて來だての牛乳を一本宛かゝへて林間に集つた。西の方の湖上は静かでまるで鏡の面のやうだ。遠く近く行く船影はおもちやのやうだ。東の方を見るに放送局も袖師ヶ浦も嫁ヶ島も一と目に見える。先生のお伽噺を聞きながら、お茶の會がすんでいよ／＼水泳だ。

「水泳の用意！」

「うまい！」

「萬歳！」

一同はわつ／＼と聲をあげてよろこんだ。てんでに水泳着を着終るに整列して、裏山の小路をぬけて水泳場に着いた。

蟬の聲がかしましい。

人員點呼と體操がすむと、我先にと水の中へ飛び込んだ。泳げぬ連中は浅い所で蜆取りや水かけをしてゐる。湖は静かできれいだ。僕は

吉本君や太田君達と五十m競泳をやつた。時々通る電車の窓から帽子を振つたり、ハンカチを振つたりして行く人もある。

寺へ歸つて井戸端で身體をすゝいで林間へ集まると嬉しい中食だ。青葉の間を通して吹き來る湖風を浴びながらいた。だく御飯のうまさ！もう一杯でも食べられるやうだつた。

中食がすむと、一としきりトランプや野球盤やで賑ふ。

午後は女學校の先生が御見えになつて、天倫寺山の植物について面白いお話をして下さつた。

四時に午後の水泳から歸つて、林間學舎の第一日は終つた。僕は今



林間學舎

日の掃除當番だったので、家へ歸つたら五時前であつた。楽しい林間學舎よ！早く明日になればいゝになあ！

十、隱岐島だより

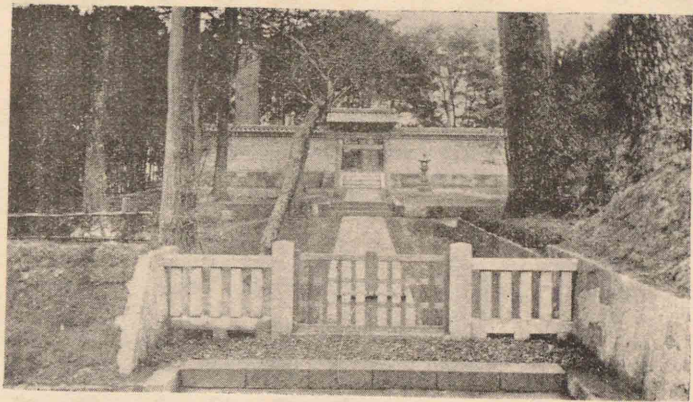
金子君約束によつて手紙を書く。僕は今西郷の旅館の窓から暮れて行く海原の景色を見下しながらこの手紙を書いてゐる。隱岐は僕達が松江で考へてゐたやうな小さい島ではなかつた。殊に島後は島さいつても面積は三百方秆以上もあつて、中には海拔七百米もある高い山もある。そして隱岐は日本海上のパラダイスといはれる程あつて、何處へ行つても景色のよいのにはびつくりさせられた。その上土地の人々は親切で本當に氣持がよい。僕達は昨夜十一時半に境港を發し、波靜かな三十哩の海上をすべ

つて今朝七時過ぎに別府に着いた。

上陸して黒木神社に參拜した。この地は元弘の昔、後醍醐天皇が御流されなかつた所だといふ。僕は黒木神社の社頭に立つて、松風の音を聞きながら元弘の昔語りをきいて、何ともいへぬいたましい氣持になつた。

見下せば眼前の内海は眞夏の朝の日がきら／＼と小波にくだけ、灣内の見付島は元弘の昔を語り顔に見えた。この内海は島前の三つの島にかこまれた立派な入海で、日露戦争の時、日本艦隊のかくれ場所だつたといふことだ。有名な黒木づたのあるのもこの海だ。焼火神社にも參拜して見たかつたが、時間がなかつたので中止して、小蒸汽に乗つて十時過に對岸の菱浦に着いた。

こゝから三秆ばかりの田舎道を歩いて、僕達は後鳥羽上皇の行在所跡を訪ねた。參道の左側には上皇の御火葬場跡があつた。行在所



後鳥羽院火葬場

へした。
こゝから小さい發動機船に乗つて、眞夏の陽に輝く紺青の海を西

であつた源福寺の跡は荒廢して庭一面に雑草が生え、有名な勝田池は草に埋れ、音無松も枯れて、今は皇太子殿下御手植の松が青々と茂つてゐた。源福寺は明治の初年に焼き拂はれて、今は僅に礎石が残つてゐるばかりで、寺跡には一面に杉の木が植ゑられてあり、その中央に後鳥羽上皇行在所跡と書いた石碑が建つてゐた。歸りに村上家を訪ね、上皇に關する種々の寶物を見せてもらつて再び菱浦の港へひきか

郷港へ急いだ。はるか前方には紫色の島後の島が横はり、その間に東には三郎岩・小森・大森・松島、西には冠星上二又なごいふ岩の島がそびえてゐて、都會で育つた僕には何ともいへぬめづらしい眺だつた。殊に時々船の近くを飛魚の群が飛び上るのはほんとうに面白かつた。

明日は飯山古墳や國分寺跡や玉若酢神社・水若酢神社等へ參拜し、明後日は島後を一周する筈だ。では今日はこれでヘンを擱くよ。繪葉書を少しばかり送りましたから見て下さい。
あゝ、何時の間にか海はすつかり暮れて、海上はいささり火のイルミネーションだ。

七月三十日

金子君

土玉造遠足

有島一雄

十一、玉造遠足

今日は玉造への秋季遠足の日だ。通りなれた街も今日は何だか愉快だ。善光寺を過ぎるご間もなく忌部越の田舎道へ入った。兩側の水田には重さうに穂が垂れてゐる。しばらく行くご道路の右手に野白の紙漉場があつて、紙をすいてゐた。賑やかに話しながら段々山間に入るご、兩側の山はもはや紅葉しかけてゐて、所々が美しい色ごりをなしてゐる。

まもなく水源池へ着いた。先づ水源池事務所で松江水道のお話を聞いてから濾過池を見せてもらつた。こゝで濾されたきれいな水は太い鐵管によつて床几山の配水池へ送られるのである。こゝを去つて約四百米ばかり上るご、忌部川を堰止めて設けられた貯水池がある。高く築かれたコンクリートの大堤防、満々ごたゝへた大水源池――

こゝが吾等松江市民の生命をつなぐ水道の源なのだ。満水の時は五萬人の人口に對して百日間の水量が貯へられてゐるごのこゝであつた。

水源池を發したのは午前九時半頃、山道を通つて十時半頃に目指す玉造温泉に到着した。途中の山畑には白いそばの花や赤く熟れた柿が目立つて美しく、山きはに顔を見せてゐる栗の實なご秋の氣持をひきたゝせてゐた。

玉造に着くご先づ縣社玉作湯神社に參拜した。社は小さいが此の社は太古の攻玉地の中心で、玉作部の祖神櫛明玉命をお祀りしてあり、當社には今も古代の曲玉管玉平玉硝子玉等數百點の品物が寶物として保管されてゐるごのこゝであつた。先生はこゝで

「この玉造の地は温泉ご共に、青瑤瑤によつて天下に知られてゐる。太古よりこの地は種々の玉を造つてゐた所で、畏くも三種の神器の

一である八坂瓊曲玉はこの里で櫛明玉命がお作りになつたものだといふ。又神武天皇の御即位の際にもこの地から御祈玉を献納し、その後代々御祈玉を朝廷に奉る例になつてゐたのである。ご御話し下さつた。

太古の玉造をしのびながら私達は玉造公園へ登つた。頂上に立てば宍道湖は眼下にひらけ、はるかに十六禿の絶壁に對し、湖と山との勝景の收められるよい所である。

辨當を食へ、しばらく公園で遊んでからこゝを下り、築山といふ所にある舟形石棺を見に行きた。この古墳は太古の貴人の墓だといはれ、今では史蹟保存地となつてゐる。

次に長樂園に行つて温泉プールで泳いだり、きれいな瑪瑙細工を見たりした。この外玉造の地には見るべき處がたくさんある。このことであつたが、時間がないので一同は櫻の並木の川堤に沿うて湯町

に向つた。湯町では出雲製陶株式会社工場を見學した。

秋の陽は暮れるに早い。

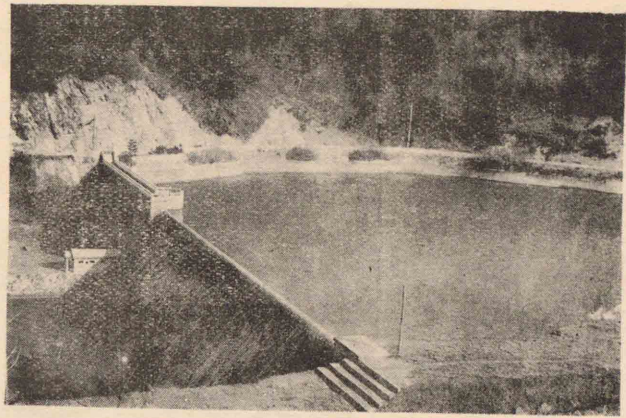
乃木濱まで歸つた頃の宍道湖は、落陽を浴びて金色に輝いてゐた。

三、水の旅

僕が廣い水源池で呑氣に遊んでゐる。ある日のことであつた。不意にぐんぐん強い引力でひきつけられるなと思ふ間もなくいきなり氣味悪い大鐵管の中へ吸ひ込まれていつた。はてなと思ひながらしばらく進むと急に明るいコンクリート造りの池に出た。見るさまつきまで一緒に水源池で遊んでゐた仲間も來てゐたので、こゝは何處かご聞いて見たら

「こゝは瀘過池といふ所だ。僕達の體の中の混り物をこつてきれい

にする所で新舊六個あるのだ」



貯水池

と話して呉れた。は、あと思つてゐる内に底の方へ引きつけられて、細い砂の層の中へ入つた。こゝをぬけるに少し大粒の砂の層があり、次にぎつしり敷き詰められた煉瓦の間をくゞつた。何だか體がきれいになつたやうな氣がして、あたりを見ると、何時の間にか又暗い大鐵管の中へ入つてゐた。約四軒も行つたかと思ふ頃、急に上り勾配に變り、ほごなくうす暗いたまりにつき出された。

「おい、こゝは一體何處なのだ」

と聞くに、さつきの友達が

「僕も今聞いたのだが、こゝは床几山の配水池ださうだ。僕と君とは同じ管で來たが、濾過池からこゝまでには今一本の鐵管が來てゐて僕達は一秒間に百三十三立も送り出されてゐるこのことだ」
と聞かせて呉れた。その時入口の扉が明いてまぶしい光りが流れ込むと同時に役人らしい人が入つて來て、一とわたり池を見まはつて出て行きた。

「さたん私の體はぐつと強い力で、又太い鐵管の中へ吸ひ込まれ、非常な速度でぐんぐん下つて行つた。間もなく勾配がなくなつたので、ほつとして左右を見ると、幾つもの小路が分れてゐて、仲間の誰彼が忙しさに吸ひ込まれて行く。行く手を見ると、ここまでつゞいてゐるのか不氣味な暗い鐵管は果もなくつゞいてゐる。」

やがて上の方で雷のやうな響が聞え出した。

「自動車を通るのだよ」

物識りらしい仲間の一人在説明して呉れたので、私は始めて街の通りの下を流れてゐるのに気がついた。間もなくあたりが急に賑かになつた。下の方では船が通るらしい音がし、耳近くからはカラ／＼と忙しい下駄の音が聞えて來だした。それもまた、く間に過ぎると、右に折れ左に曲り管は追々小さくなつて來た。ふと見上げる、頭の上には出口らしいものがあつた。

「何だらう」

とひそりごこをいふと

「火事の時に飛び出す消火栓さ」

といふ聲がした。

やがて行手はごめられて、耳をつんざくハンマーの音が響いてゐる。僕はその手前から右手の小路に吸ひ込まれて、水車のついた機械の中を通つて、少し進むと急に「さあー」といふ音と一緒に明るく世の

中へ投げ出された。

びつくりしてあたりを見まはすと、可愛らしい學生服を着た生徒さんのさげたバケツの中であつた。

長い旅をつゞけて來た私が、生徒さんのお手傳をして学校の掃除をするのだと思ふと何ともいへぬ嬉しい氣持がした。

三、松江の歴史

松江は今でこそ人口五萬に近い山陰第一の都會であるが、以前は白潟、末次といつて宍道湖畔の寂しい漁村に過ぎなかつた。そして大橋川の下流、今の高等學校前の廣い田圃の邊は一面の入江で、田町のあたりは沼地だつたといふ。

かゝる寂しき漁村が、どうして今日のやうな立派な都會になつた

か。それは今から約三百三十年ばかり前、堀尾吉晴公が出雲、隱岐の領主として松江に移られてから後のことである。

吉晴公は慶長五年出雲に入國して、先づ富田城に入られたが、この地は政治上から又戦略上から將來の城地としては不適當であるといふので色々研究踏査の結果、今の城山龜田山の地を選んで移城されることゝなつた。千鳥城のある龜田山は、今では濠をめぐらしたこゝんもりとした小山であるが、その頃は中學校のある赤山と山つゞきで随分大きな山であつた。そこで吉晴公はその中間を切り割つて切り取つた土で、その頃沼地であつた田町や中原邊を埋めて土屋敷を作らせる計畫を立てられた。

かうして北西には濠を掘り、南東には石垣を築いて城地を拓き、天主閣を起すと共に城下町としての松江の市街を造らせられた。先づ道路を作つて交通の便を計つたり、神社や寺を富田から移して信仰

の中心地としたり、或は富田から商人を移したり、家臣を移住させた等、昔の寂しかつた漁村は吉晴公の移城によつて新らしい都會の形を整へて來たのである。

思ひがけざる松江が出来て

富田は野となり山となり

その頃の謠にこんなのがあつたが、松江が出来た當時の有様がよくうかがはれる。

かくて慶長十二年に着工した龜田城造營は五ヶ年の日月を費して、同十六年の冬に至つて殆ど竣功を告げ、南北田町、外中原、北堀、奥谷等の土屋敷も着々完成するに至つた。これが今日の大松江市の生れ出る第一歩である。

それから後、後京極氏を経て寛永十五年に松平直政公が信州より松江に移封せられてより明治維新まで、その城下町として次第に發

展し現在に及んだのである。(島根縣史に據る)

西、松本歡次郎翁

昔から我が郷土の實業界に多くの功績を残した人は數多くあるが、その中の一人に松本歡次郎といふ人がある。

翁は今から約九十餘年前、伯耆國渡村で生れた人で、先祖は尼子經久の家來であつたといふ。その生涯になした事業は實に多いが、中でも我が松江市に最も關係の深いことがらを述べてみよう。

歡次郎翁と松江市との關係が出来た最初は、明治五年にその居を市内寺町に移し、人蔘栽培製造の拂下げを受けた時からであつた。その頃まで人蔘業は松江藩の事業として人蔘方で營まれ、雲州人蔘と評判せられて、その名は廣く世にあらはれ、盛んに支那と取引きされ

てゐたが、廢藩後は縣廳でこれを管理してゐた。しかし間もなくこの事業は民間に移るやうな様子であつた。歡次郎翁が考へるに、

「若し事業が民間に移れば、よくない考の人が粗末なものをむやみに製造して利益を得ようとし、そのため今迄有名であつた雲州人蔘もその名を失ひ、この地方の大切な事業もすたれてしまふだらう。實業家のつくすべきはこんな時だ」

といふので、熱心にその事業拂下げを願つた。すると果して多くの競争者があらはれたが、翁の熱誠により事業は遂に翁に拂下げられたのである。翁はその後度々支那に行つて需要地の様子を調べたり、或は上海に出張所をつくつたり、又は日本中に種子を配つてその栽培を盛んにしたりなど、一心に人蔘業のためにつくしたので雲州人蔘の名は益々高まつたのである。

次に特筆すべき事は、翁の松江地方經濟界につくした事である。即

ち松江銀行、山陰貯蓄銀行の創立、松江商業會議所創設等のことである。

明治の初頃既に松江市には色々の銀行があつたが、多くはその土臺がしつかりして居ないの故、まだ當路者（ちやうろくしや）がなれてゐなかつたため、それ等の銀行の多くは倒産（たひさん）したので、商人も一般の人々も非常に困つた。歡次郎翁はどうかして松江市に立派な銀行を設けて人々の便利にそなへようと思畫して、東西にかけ廻つて力をつくした。しかし中には今迄のよくなかつた銀行の事を考へて反對を唱へ出す人もあつたので、非常に苦心したが翁はごこまでも自分の決心をかへないで、ごう／＼明治二十二年に十萬圓の資本で、松江銀行を設立した。その後松江銀行は次第に發展して現在のやうになつたのである。又翁は少しのお金でも儉約して預けようと思ふやうな人々のために、明治二十九年に山陰貯蓄銀行を創立した。そのためお金を利用しよ

うとする人や、少しの金でも貯金しようとする人達は非常に利益を受けるやうになつた。

その後縣下に次々銀行が出来るやうになつた。

その他翁が我が市のためにつくしたことは數々ある。中でも明治二十六年の松江市大洪水の時に於ける翁の盡力、或は明治二十七年の千鳥城修繕の功、又は明治三十二年の松江神社遷座の功等は特に我々が感謝の意を捧げねばならぬことごとである。

翁は實にの奮闘の人であり、又愛市の人であり郷土實業界の偉人である。（舊藩美蹟に據る）

十五 島根の水産

島根縣は本州の西端に位し、日本海に面した細長い縣である。海岸

線の長さは五九三籽もあつて、面積の割合からいふと長い方である。その上、出雲・石見・隠岐に跨つて廣い漁礁を持ち、且近海には寒暖二流が流れてゐて水産業には最も適した地方である。然るに本縣水産界の實際を見るに、格別産額の上つて居ないのは實に遺憾である。これは冬季に於て荒天に禍されるといふ自然的の原因にもよるが、又一面遠洋漁業の不振と新式の漁獲法が普及してゐないためである。今本縣の水産總額を見るに七百六十九萬圓で、その中沿海漁獲高は四百六十萬圓、遠洋漁獲高は百一十一萬圓、水産製造高は百八十二萬圓、又水産養殖高は八萬五千圓である。そしてその重なる獲物は鯛・鯖・鰯・柔魚・和布等で、水産加工品としては、罐詰するめかまぼこ・和布・海苔・魚油等である。

その外、赤貝・白魚・公魚・鰻等は中海、宍道湖等の特産物として、その聲價を全國に知られてゐるが、その産額は何れも餘り多くはない。

次にこれ等、遠洋・近海の漁港を擧げると、濱田・惠曇・西郷・大社等で、その二大中心地をなすものは濱田漁港と惠曇漁港とである。近時濱田・惠曇の二港は漁港としてその設備が完成に近づき、共に將來の活躍が期待せられてゐる。特に惠曇港は、我が松江市とは水陸兩路を以て結ばれた密接な關係があり、今後の發展は非常に重大な希望を以て待たれてゐる。

我等は島根縣の自然と水産業とを考へ、大いに研究と努力とを積み、産業方面に恵まれぬ本縣のためこの方面の開拓を計るべきである。

六、瓦斯工場見學

今日は秋晴の好天氣。午後の課業を終へると、私等一同は先生に連

れられて町はづれの市營瓦斯工場の見學に出かけた。道を本通につて、東本町の復興の新市街を東へ四百米も進むと、行手に銀色に輝く新設の瓦斯タンクがそびえてゐた。

作業服の技師の方の案内で、私等は先づよりつきの大きい建物の中に入った。こゝは瓦斯發生爐のある所で、見上げる程の高い煉瓦爐が二つ並べて築かれてある。そこには三四人の職工が居て、時々爐の口ストルをあけて、眞紅な焰の踊り狂ふ中へ、手早くコークスを投げ込んでゐた。技師の方はこゝで

「この爐の中にはレトルトが七本も横たはつてゐて、それ／＼に百二十疋からの石炭を入れて、かたく口を閉ぢて蒸し焼きにするので、さうして發生した熱い瓦斯はレトルトから導かれて一度水の中をくぐりぬけ、更に戸外の空氣冷却機に入ります。こゝに入ると瓦斯はすつかり冷えると共に、含まれてゐたタールも分れるのです」

と説明して下さつた。

冷却機を出た瓦斯は、拭洗器の中に入る。高さ六米もある大圓筒で、中には三段の棚が設けられてゐて、雨のやうに水が落ちる中を瓦斯は上つて行き、その間に含まれてゐるアムモニヤが除かれるのださうだ。次に瓦斯脱硫器に入る。この中には酸化鐵と鋸屑が入つてゐて、瓦斯中の硫化水素を吸取らせるさうだ。こゝを通つて出ると始めて、立派な石炭瓦斯となるわけだ。

かうして出來上つた瓦斯は、基メーターによつて量られて一と先づあの銀色の大タンクの中へ落ち着くのである。技師の方の話によると、このタンクの外槽の直径は十六米、高さは七・七米、内槽は實に千四百十六立方米の瓦斯を貯へ得るもので、市内の需要家へ瓦斯を送り出すもこの力は、このタンクの内槽の重さによるのである。このことであつた。愈々市中へむけて送り出される時には、整壓機を経て壓

力を整へられるのである。

歸りに試験室と器具室とを案内してもらつた。目新しい器具が色色あつた中に、瓦斯アイロン、瓦斯煙草盆、瓦斯ストーブ等はとり分け珍らしく思つて見た。

七 神在祭

我が國では昔から陰曆十月を神無月といつてゐるが、出雲國に限つてこれを神在月とこなへてゐる。それは太古、出雲國の勢が盛んであつた頃、日本中の神々が毎年十月には出雲大社に御集りになつて、政治上の重要な會議を御開きになることになつてゐたのでこんな名が生じたのである。

神々が出雲大社に參會せられるのは陰曆十月十一日から十七日

までの一週間で、その間大社では神在祭一名御忌祭といつて重大な御祭が行はれてゐたが、今では陽曆十一月十一日から七日間行はれることになつた。

出雲大社の重要な會議を終らせられた神々は、八束郡佐太村の佐太神社に御立寄りになるといはれてゐる。この社は佐太の大神をはじめ、伊弉諾尊、伊弉册尊その外の神様が御祀りしてあつて、明治維新までは出雲大社と並んで有名な社であつた。

神々がこゝへ御立寄りになるのは、十月は神々の御母君に當らせ給ふ伊弉册尊の神遊ばされた月であるので、その喪に服せられるためであることなへられて居る。即ち陰曆十月二十日（現在は陽曆十一月から二十五日までの六日間、御忌祭又は神在祭といつて、同社の玉垣内は七五三繩を張つて出入を禁止し、社頭に假殿を設けてこゝから一般に拜禮することになつてゐる。このお祭は同社の重大なお祭

で、その間は一般に謹慎を第一とし、昔はこの地方では舞も歌もやめ、色々な工事も中止し、又裁縫もせず、月代も剃らぬといふ例になつてゐた。

神在祭の頃は日本海は波風の荒い頃となるので、人々はこれを「御忌荒れ」とこなへてゐる。この頃、惠曇浦附近の海邊に龍蛇があらはれる。これは神の使であるといはれてゐて、佐太神社には昔は龍蛇取りの社人が置かれ、神在月に入るに毎朝惠曇浦附近の海邊を視廻つて、岸邊に寄られた龍蛇を迎へて神社に献上することになつてゐた。特別な社人は置いてないが、今も龍蛇を献上するのである。

この御忌祭の最後の御祭を「神等去出神事」といつて、二十五日の夜同社で行はれる。この神事が終ると日本中の神々は、それごとく自分達の御國へ御歸りになるのである。日本は神國である。

ごりわけ我が郷土出雲は神の國である。

六、直政公の初陣

時は慶長十九年十二月の四日、砲烟は陽の影をかくし、矢叫びの聲物凄く、大阪冬の陣は今激戦の眞最中である。その中で殊に激しい合戦のつゞけられてゐたのは、大阪方の勇將眞田左衛門佐幸村の堅めてゐた玉造口である。幸村は天下に名高い大軍師、加賀、越前の勇將猛士が先を争つて攻めかけたが、雨あられと打ち出す矢玉に、誰一人眞田ヶ丸に近づくことも出来ず多くの討死を殘して引き揚げた。後陣にあつて此の不甲斐ない味方の敗軍を見て

「言ひ甲斐なき者共よ」

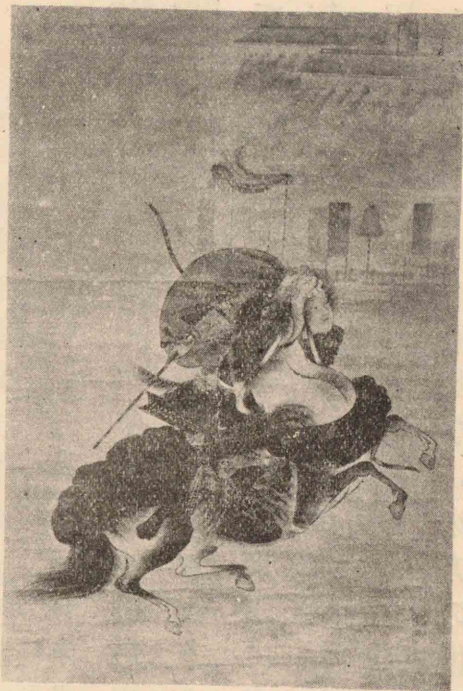
さて、雨と降り来る矢玉の中へ唯一騎、駒に鞭打つて馳せ出した若大

將があつた。これこそ家康公の孫で、越前秀康公の第三子、御年僅に十四歳の直政公であつた。まつしぐらに馬を進められた直政公は、眞田ケ丸の堀を乗り越え木戸際に攻め寄らうとされた。敵の打ち出す弾丸はいよ／＼激しくなつて来る。

此の有様を見て驚いた御付きの武士、天方通總は、馬を早めて馳せ付け、公の矢表に立ち塞がつて、

「あいや殿、しばらく。大將の御身として先がけし給ふとは何事です。ごうか後陣で士卒の指揮をして下さい」

ご御止め申したが、直政公は



直政公初陣圖

「汝こそ後陣にゐて士卒の指揮をせよ」

ごいひすて、馬を進められるので、通總はなほも矢表に立ち塞がれば、公は

「武士たる者は進んで死するが本望である」

さて、鞭を振つて、通總を打ちつけて馬を進められた。通總は敵に公が大將であることを知らせまいと再び馬前に立ち塞がれば、公は後れじと進み給ひ、かくて六七度も先を争つて進まれた。

この有様を城中より見たる幸村は、主徒のうるはしい情誼に感じ、打ち方を止めさせ

「某は眞田左衛門佐幸村ですが、實に天晴な御武者振、御姓名を承りたし」

ごいふ、公も直ちに

「我こそは越前秀康の三男、出羽介直政なり」

ご答へられた。

「天晴のよき大將かな。かゝる大將を引き受けたのは幸村の面目やがて運盡きて討死の節はこの首を差上げませう。されごこゝは今大將たる御方の進ませ給ふ所ではありません。早々馬を入れ給へ。あゝ天晴の大將かな。今日の御高名の御記念、差出し申しませう」
さて櫓の上から軍扇を投げ出した。

その言が終るか終らぬに直政公は大音聲に、

「運盡きて討死せられた貴殿の首ならば、雑兵でも打ち取りませう。今、こゝで謀を運らし、武勇を振はるゝ眞田殿の城を攻め落して其首を申し受けてこそ武士としての名譽があるのです。御用捨は無用十分、矢玉を打ち出されよ。その矢の下でこの城を攻め落して御目にかけよう」

ご、少しも馬を引かるゝ様子もない。これに勵まされた越前家の兵を

はじめ井伊家、藤堂家の軍勢は、鬨の聲をあげて一時に攻めかけた。

あゝこれが僅かに十四歳の少年の働なのでせうか。これより直政公の勇名は天下に轟き、武士の家では男子が生れた時には、公の初陣の圖を掛けて出世を祈つたといふ。

公こそは後に我が松江藩祖ご仰がれ給ふた御方である。

(松江藩祖直政公御事蹟に據る)

九、天然記念物

我々の住んでゐるこの地球の上には、數限もない天然物がある。それ等の中には、學問の上から見ても、景色の上から見ても、非常に大切なものがたくさんにある。しかし世の中が開けるにつれて、その原因には色々あるが、それ等のものは次第々々にそこなはれて行く。そこ

で世界各国では、それ等の動物・植物・地質・礦物等の中で、ほとんどなくなりかけたものや、又はその代表的な標本となるものなどをすべて天然記念物といつて、その保存に大變力を入れてゐる。

日本の國は、氣候や、領土の關係上、動物・植物の種類が非常に多いので天然記念物にも富んでゐる。

我が島根縣下で天然記念物として指定せられてゐるものは（昭和十月）隱岐のくろきづた産地・明神の松・高尾暖地性・濶葉樹林・玉若酢神社ノ八百杉・日御碕の經島うみねこ蕃殖地・八束村の大根島ノ熔岩トネル・那賀郡國分村の石見疊ヶ浦・野波村の築島ノ岩脈及多古ノ七ツ穴・仁多郡横田村の岩屋寺ノ切開の九である。この外、名勝及天然記念物として立久惠・鬼舌・振・潛戸の三がある。

くろきづたは世界中、紅海より東では獨り我が國隱岐の菱浦灣内と別府灣内にのみ産する海草で、非常に珍らしいものである。

うみねこは鷗の一種であつて、その鳴聲が猫に似てゐるのでこんな名がついてゐる。蕃殖地は日本では眞に少いといふ。

疊ヶ浦は廣さが約三ヘクタールあつて、海底の隆起したものである。これは明治五年二月の濱田地震の時に出來たもので、歴史が始つてから、後海底が隆起したものの、模範的なものといはれてゐる。その他の天然記念物もそれの特色があるものばかりである。

昔から我が國は自然の恵を受けることが多く、したがつて國民は自然界を愛護する情に富んでゐる。徳川時代には全國各藩に於て、それぞれ名勝・老樹・名本・岩窟等を保護し、或は留山といつて名山の樹木を伐ることを禁じたり、又は色々な書物などによつて、それ等を人々に知らせてゐたのでも明らかである。

我等もよく天然記念物の價值と意義とをわきまへ、これに對する用意を十分に心得、この天から與へられた自然界の寶を立派に保存

してゆかねばならぬ。

三、山陰土産—松江

この松江へ来るまでの途中での旅の印象、そこで望んで来た入江の水、そこで望んで来た岸の青田などは、まだ私の眼にあつた。その中には恐ろしいまでに龜裂を生じた田もあつて、あれは今年の旱り續きの結果か、いや、あれが鹽田といふものか、汽車中の乗客が大騒ぎしたことも忘れられない。松江に来て見て、この地方にも田植時分の雨の少かつたことを知つた。こんな水郷の感じのするところで、どうして水に不自由したらう。それを私が宿の女中にたづねたら、

「水は水でも、潮水でございますもの」

それが女中の返事であつた。農夫等は水を見ながら、乾いた田をどう

するごとも出来なかつたといふ。さういふ田は今年だけ畠にして、また來年の田植の時を待つといふごごとであつた。

私達親子のものは、めつたにこんな旅と一緒にしたごともない。二人きりになると、互ひの旅の心持も比べて見たい。

「御覽な、ごこの宿屋に行つても二の膳付だぜ。御馳走して貰ふのはありがたいが、みんな食べられるやうな物を出したらどうだらう」

「いや、僕はさうは思はないね。お客さまの好きなものもあれば、嫌ひなものもある。宿屋ではそこまでは分らないだらう。だからいろ／＼なものをそこへ並べて出せば、お客さまは自分の好きな物を喰ふ、父さんのやうな人ばかりがお客さまぢやないからね」

「お前のいふごとも、一理窟あるかナ」

こんな話も旅らしい。

この松江の宿で私達は七月十四日の朝を迎へた。大橋は水に映つ

て、岸から垂れさがる長い柳の影もすゞしい。私達の眼にある光と影
とで、朝の湖水らしくないものはなかつた。何を見ても眼がさめるや
うであつた。舟のすきな鷄けい二は石垣の下に繫つないである宿の小舟をつ
け、早速宿の主人に交渉して、朝のうちうちにそこいらを漕ぎ廻つて來た。
まだ朝飯には間があつた。私も鷄二と一緒に舟で宍道湖の上に浮ん
で見た。櫓ろは私もすきで、東京淺草の新片町に住んだ時分には、よくあ
の隅すみ田川の方へ舟を出したこともある。舟も何年振りか。それを私も
思ひ出して自分でも櫓をあやつりながら嫁ヶ島の方角をさして漕
ぎ出して見ると、思つたよりもその邊の水の浅いことも分つた。澤山
な蜻蛉せんながの群は水の上を飛んでゐた。私達はその朝の空氣の中で、時々
びつくりするやうな魚の飛ぶ音をも聞きつけた。その邊の藻の多い
ところには、流れるまゝに舟を任せて置いて、鰻うなぎでも引き揚げて行く
らしい漁夫もあつた。(島崎藤村山陰みやげより)

昭和七年十月二十五日印刷
昭和七年十月三十日發行

〔非賣品〕

著作兼發行者

松江市内中原尋常小學校
代表者 内田 勇

松江市南田町七番地一

松江市雜賀町八番地

三島藏市

松江市殿町三百八十三番地

松陽新報社

印刷所

發行所

松江市内中原尋常小學校

文庫

1
932
5707

広島大学図書

2000065707

